

# 新型コロナに関わる職場の緊急アンケート結果

2022年3月10日  
京都医療労働組合連合会

## I 概要

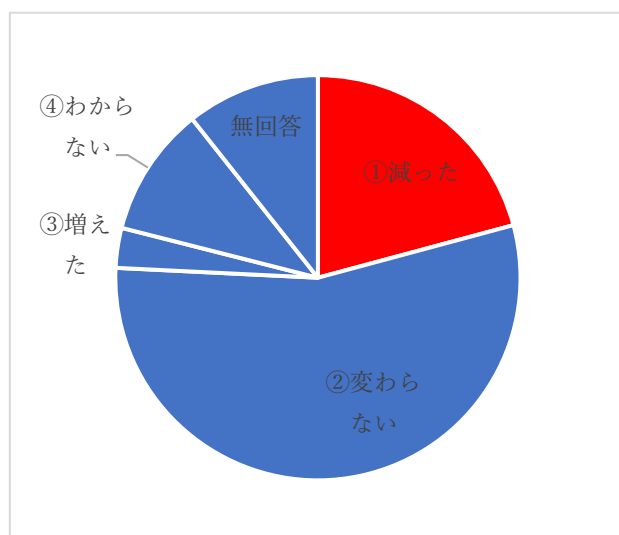
私たち、京都医療労働組合連合会（34組合・5,533人、執行委員長：勝野由起恵）は、10月から2月にかけて、新型コロナ禍における人員体制、精神的負担、離職、差別・偏見などの働き方の変化、政府のコロナ対策についてなどに関するアンケートを取り組みました。1,792人（11組合）の組合員（対象は全ての職種）から集約しました。結果は、以下の通りです。

## II 調査結果

1 新型コロナ感染前と比較し、2割の職場で人員体制は減少、増えたのはたったの3.2%

新型コロナ感染前と比べて、部署の人員体制が「減った」と回答した人は373人（20.8%）、「増えた」と回答した人は57人（3.2%）です。半分以上（55.0%）の職場で「変わらない」との回答です。

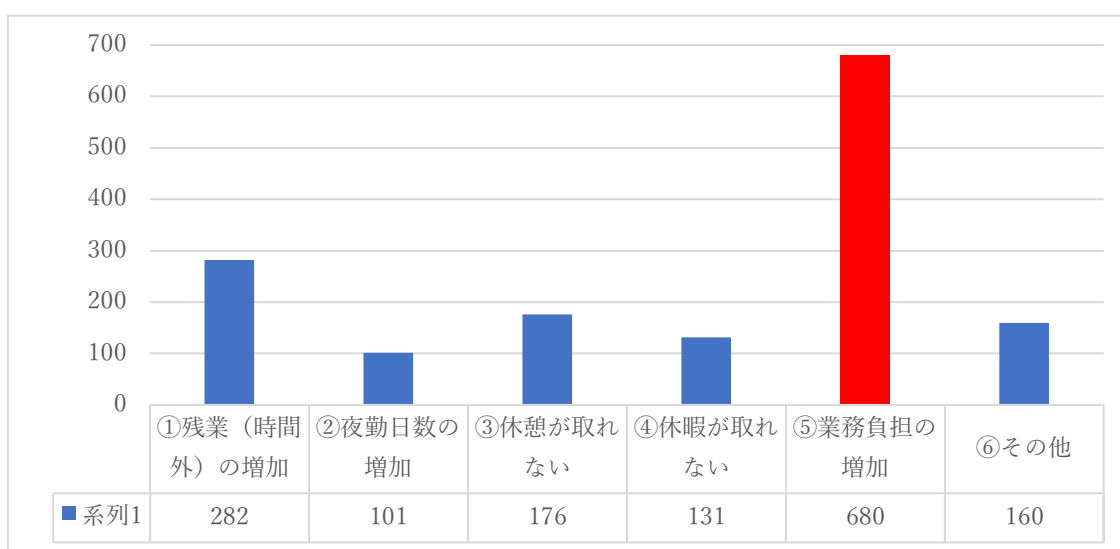
医療現場では、新型コロナ感染症拡大と言う災害級の感染拡大の下で、平時と変わらない、又は人員減の下で、府民のいのちと健康を守り続けてきたことが明らかになりました。



## 2 増えない人員体制で「業務負担」は増加

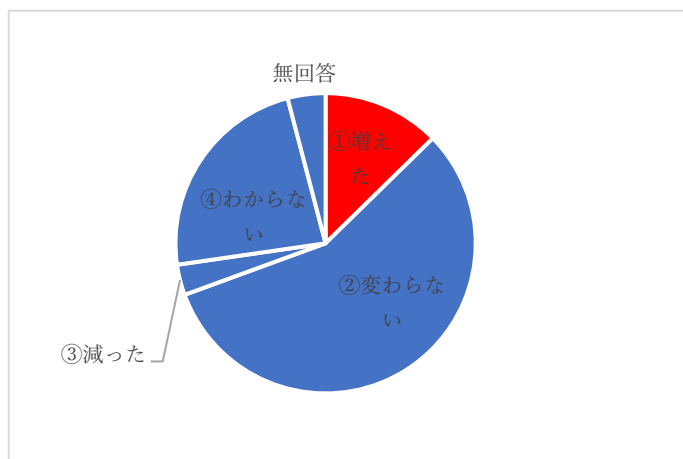
「人員体制の変更で職場環境にどんな影響がありましたか？」の質問で一番多かったのは、「業務負担の増加」(680人)です。次に「残業(時間外)の増加」(282人)、「休憩が取れない」(176人)、「休暇が取れない」(131人)と続きます。

人員体制が増えない中(問1)、業務量が各労働者に負荷がかかっているのがわかります。コロナを受け入れた病棟では、「日勤者は減った。」「夜勤時間が12時間から16時間に変更となった。」「夜勤回数が増えた。」「3日以上連続の連休がとれない。」「終わりが見えない支援体制へのストレスがある。」などの声が寄せられています。



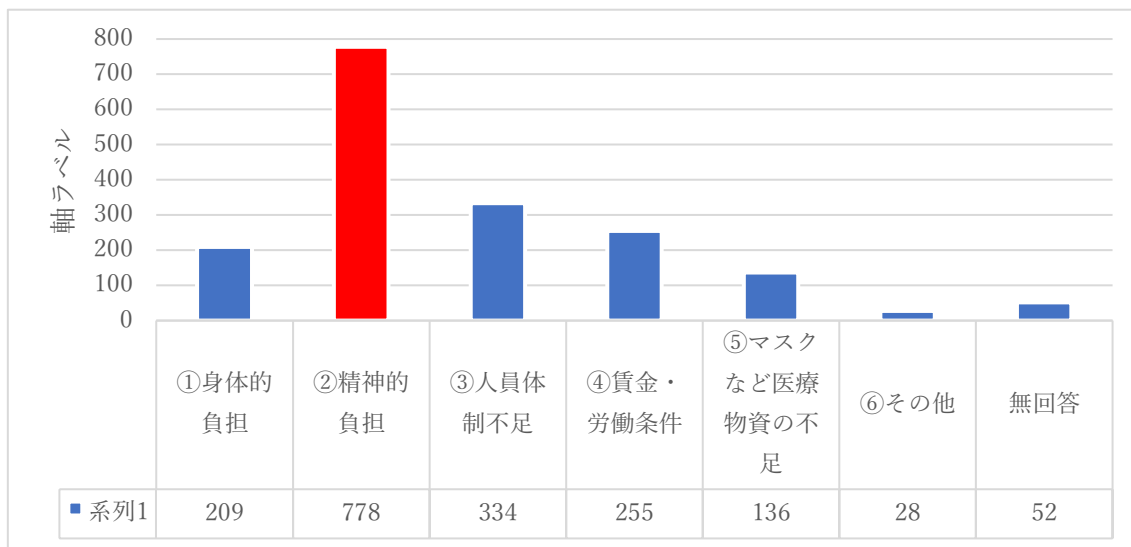
## 3 8人に1人以上(12.7%)は「退職が増えた」と。

新型コロナウイルス感染前と比べて、退職者が増えたと回答した人は227人(12.7%)です。「減った」と回答した人は59人(3.3%)、「変わらない」と回答した人は1017人(56.8%)です。



#### 4 「精神的負担」がコロナ禍で働いていて最もつらいこと。

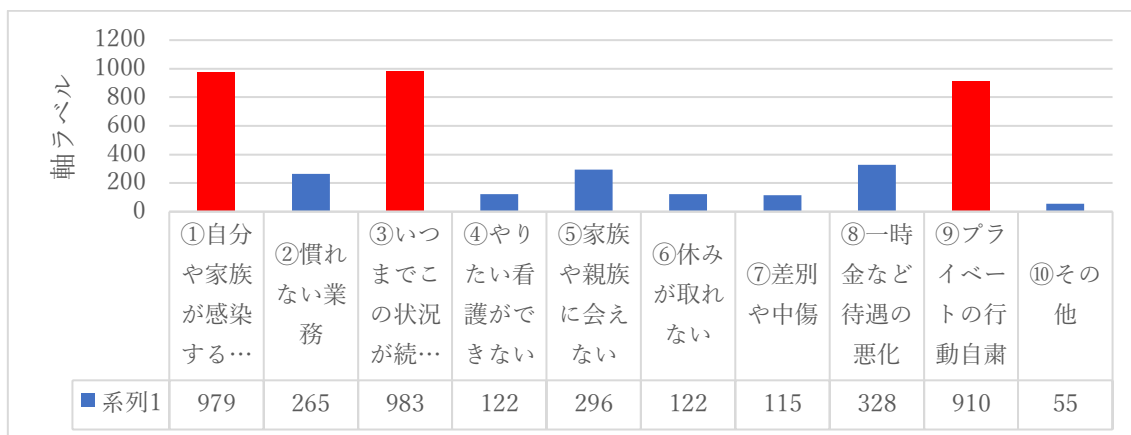
「コロナ禍で働いていて最もつらいことは何ですか？」の質問で一番多かったのは、「精神的負担」(778人・43.4%)です。次に「人員体制不足」(334人・18.6%)、「賃金・労働条件」(255人・14.2%)、「身体的負担」(209人・11.7%)と続きます。



#### 5 ゴールのない不安、感染への恐怖、行動自粛などが「精神的負担」

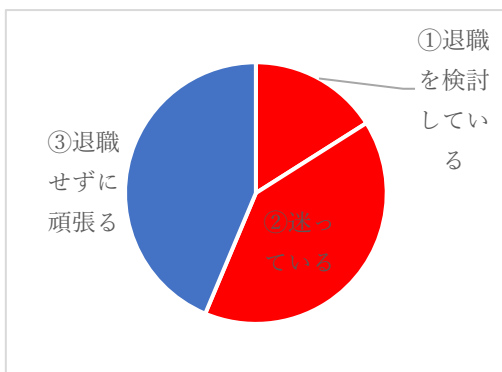
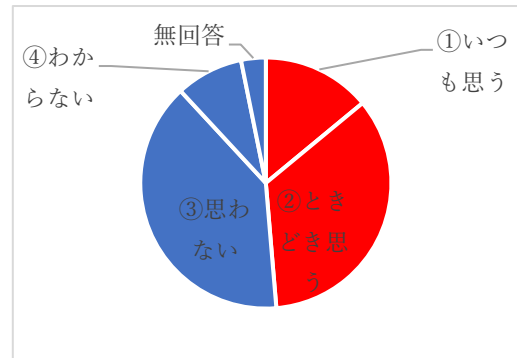
「どのようなことに『精神的負担』を感じますか？」という質問で一番多かったのは、「いつまでこのような状況が続くのかという不安」(983人・23.5%)です。次に「自分や家族が感染することの恐怖」(979人・23.4%)、「プライベートの行動自粛」(910人・21.8%)と続きます。

感染対策など業務過重・過多の下で、ゴールの見えない状況への不安、いつ罹るかわからない感染への恐怖、それに加えて、プライベートの行動制限や人に会えないなどのストレスを発散する場がなく、「精神的負担」が大きくなっているのが伺えます。



6 約半数（48.7%）、仕事を辞めたい中で業務に就いている。

「『仕事を辞めたい』と思ったことがあるか？」の質問には、「いつも思う」(251人・14.0%) 「ときどき思う」(621人・34.7%)をあわせて48.7%となっています。

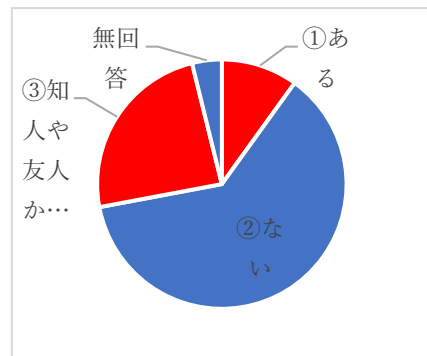


7 退職を検討している人、迷っている人が約半数以上（56.3%）

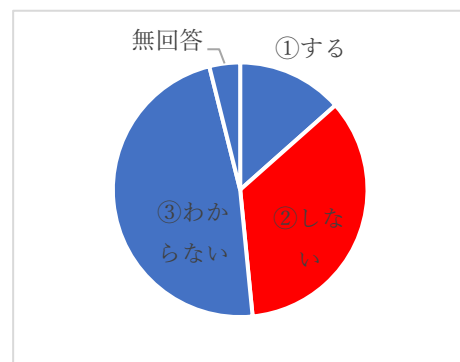
「仕事を辞めたい」人に退職についての質問には、「退職を検討している」(143人・16.0%)、「迷っている」(360人・40.3%)をあわせて56.3%となっています。

8 コロナによる差別や偏見が「ある」「聞いたことある」で34.0%

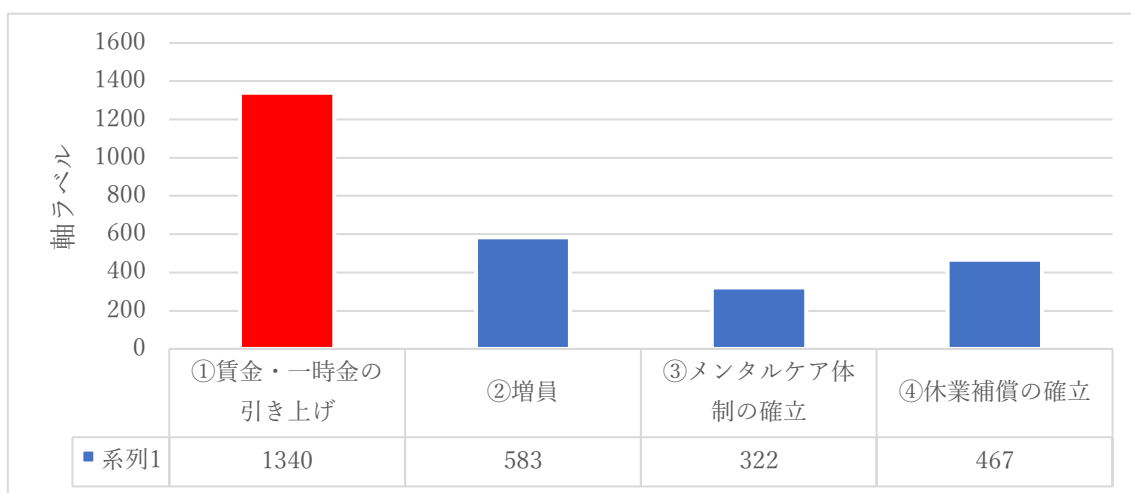
「コロナによる差別や偏見がありましたか？」の質問には、「ある」(178人・9.9%)です。一方で「知人や友人から聞いたことがある」(432人・24.1%)となっています。



9 政府のコロナ対策については、35.0%が支持しない。



## 10 国や自治体に求めることは、「賃金・一時金の引き上げ」



### ■医療・介護政策では…

